

教室と学風

名古屋大学 名誉教授

辻 敬一郎 (つじ けいいちろう)

研究者・技術者は、職業人としてふつうなんらかの組織に属している。大学では、学部・学科・講座という組織体制があり、そこに個々の研究室がある。「教室」には明確な定義がないが、研究室を束ねる同学者の活動拠点をさす。

近頃、教室の影が薄くなったという話を耳にする。研究会・会誌発行・合宿旅行などの教室行事もめっきり減ったとのことである。この傾向が「学風」の在り様と無縁ではないように思われる。

そもそも学風とは「学問研究の態度・傾向」のことであり、各教室が継承してきた「研究集団の独自性」をいう。20世紀初期の学派運動期のような鮮明な立場の表明はもはや存在しないものの、そこでは問題意識や研究技法の流儀が共有・継承されてきた。

しかし、前世紀末以降、新たな状況が生じている。課題領域の細分化にともなって同学異領域間の交流・連携が低調になり、共通認識が稀薄になった。また、実験系心理学の場合、心-脳相関への関心に根ざすという点で研究スタイルの等質化が進んだ。学術情報の電子化や電子メールの普及が研究者コミュニティの拡大を促して、それに拍車をかけている。

我が国では、平成初期の教育改革の影響も無視できない。この改革の眼目のひとつは学問分野型から課題達成型への改組であり、旧来の心理学科・心理学講座が地域学・人間学・文化学などの学科に再編された。もともと欧米に比べ小規模な教員組織であった上、このような転換の結果、教室が学風形成の場として機能することはきわめて困難になった。他に、学務増加による自由時間の減少などの事情に加え、学生サイドの生活スタイルや資格志向も関与している。

似た状況は欧米諸国でも兆している。しかし、組織規模が概して大きい運営システムが確立している、持続性のある課題研究チームが存在するなどによって教室の形骸化や学風の衰微に一定の歯止めがかかり、我が国ほどは傾向が表面化していないように見受けられる。

以上が私の率直な感想である。教室が箱物としての環境に終わるのはいかにも淋しい。自分自身、知的生産現場として機能する教室で過ごし学風に馴染んだ。また、そこで得た“余滴”に研究の厚みと広がりを与えられた。その実感からも、教室と学風の相互影響が将来も維持されることを願わずにはいられない。



Profile — 辻 敬一郎

名古屋大学名誉教授、日本学術会議特任連携会員。日本心理学会・日本基礎心理学会・日本心理学諸学会連合の理事長を歴任。実験心理学・比較心理学を専攻し、意識・行動の発生の研究に従事。空間意識の発達、食虫目動物の行動適応、視覚性感情の様態に関する諸論文を発表。編著に『心理学ラボの内外』『教材心理学』（ナカニシヤ出版）、共訳に『ギブソン：生態学的視覚論』（サイエンス社）など。同学者や他分野専攻者との酒気帯び談義・里山散策を愛好。